



隙と妖怪

いま、私たちは人間にしか恐怖を抱かない。

かつての日本の家には妖怪が現れた。それは風や光、湿度や温度などの自然環境の影響を受けやすい建築の「隙」が作りだした心象風景であった。或いは、本当に姿かたちを見せたのかもしれない。

現代の技術によってつくられた家は、機密性の高い温熱環境と十分すぎる気積と機能に満たされている。

そんな「隙」のない建築には人々の虚像は描かれぬ。

満たされているかのような現代の住宅に私たちのふるまいは制限され、自由に住まうことが許されなくなってしまった。

この提案は、恐ろしくも親しまれてきた妖怪たちが好むような場所を空間・構法的につくり出す。そして各々の妖怪によって導かれた場所は、目にはみえないもので連鎖し、ひとつの家となる。

妖怪を受け入れることは、家への愛着と自由を生むだろう。



たんころりん

柿の実が化けた妖怪。人手がなく、柿の実がなってもそのままにしてある家に現れる。入道顔の男で、柿を杖にいっぱい入れていて、柿の実を落とさながら歩く。後をつけるて姿を消す。



急勾配な中庭は窓の外をすべて緑にする。庭に生えた木から落ちる実は窓に当たって音を発し、落ち葉は窓辺に溜まっていく。手のかかる庭は住まい手に育てられていくようである。



びしゃがつく

道や廊下を歩くと、後ろからびしゃびしゃと足音が聞こえることがある。静けさの中に自分の足音が響くと、何か背後にいるような感覚を覚える。そんな気配を漂わせる妖怪。



変化する開口の大きさや床の材の幅などによって遠近感が狂う廊下。不安を感じ、歩いた道が気になる。日中は廊下から見える外の景色が切り取られ変化し、ただの移動空間ではなくなる。



ぬらりひよん

人が忙しがついているところに現れ、勝手に家に上がり込む。他人の煙草をふかしてお茶を飲んだりくつろいだ後、いざこともなく去っていく。現れたことにすら気づかない妖怪。

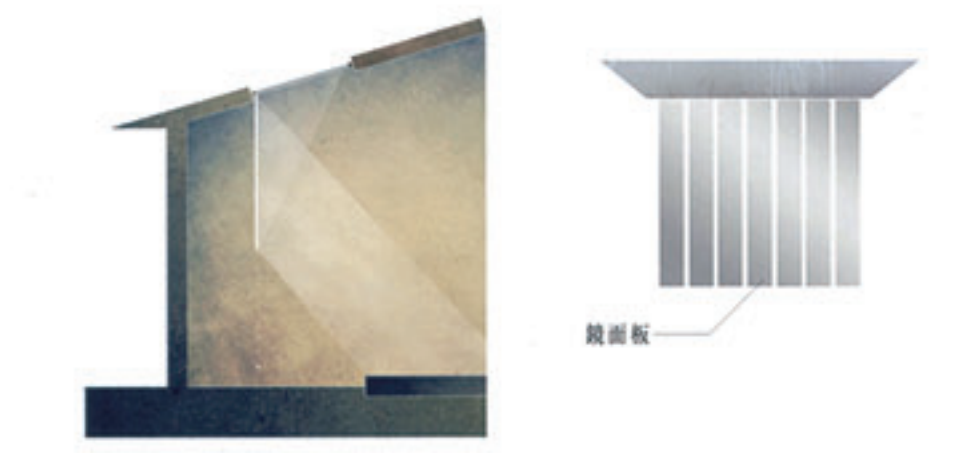


明確な玄関を無くす。連続する建具はすべて上からの吊戸になっており、敷居がない。これによって内と外の境界線は消え、色んな部屋に直接上がり込める。のれんのような玄関である。



しょうけら

家の明かり取りから人を覗く妖怪。寝ている人の三戸虫を覗いて、鬼のような姿をしていて、人が規則正しく生きているかを監視している。規則を破るものを三本の長い爪で罰する。



高い位置にある天窗。夏は開け放つと煙突効果により風が抜ける。冬は頻りに結露し、鏡面板を水滴が伝い落ちて音をたてる。水滴によって反射した太陽光がゆらめき、気配を感じる。



アマメハギ

火にあたって怒ってばかりいる者をこらしめに来る妖怪。鬼の形相で深靴をはき、手には包丁を持っている。特に子供が恐る妖怪である。

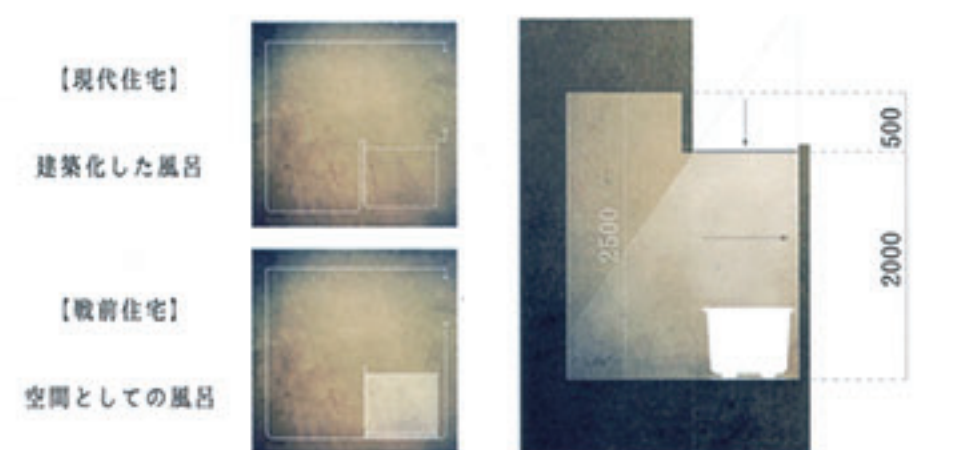


天井高1000mmの居間は立っていることはできず、畳に座るか寝転がることしかできない。空調が効きやすく、煙突効果で風が抜けていく気持ちのいい空間。つついちゃってしまふ。



垢舐め

風呂場の垢を舐める妖怪。誰もいない夜に出る。「垢舐めがくるぞ」といえば、あまりいい気持ちはしないから、風呂桶を洗うことになる。垢舐めはいわば教訓的な妖怪である。



風呂場を家から半分押し出す。上から光が入り込むことで、風呂全体が照らされ汚れや垢がより可視化される。掃除という手間をかけることで風呂に対して愛着が生まれてくる。



浪小僧

親指ほどの小さな子供姿で天気予報名人の妖怪。日照りの時に雨乞いをしたり、波の音によって人間に天気を報せる、人間に友好的な妖怪である。人間の生活に近い妖怪であるといえる。

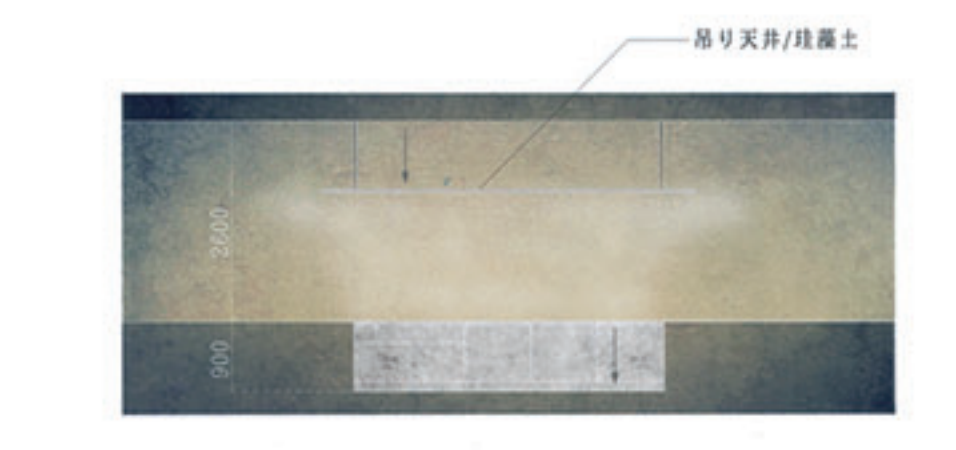


窓を引き込み、窓辺を窓辺域とする。突き出した長く軽やかな庇は、風や雨に敏感になる。深くえぐられたような窓辺域には心地良い音が響き渡る小さなコンサートホールのようなになる。



天井舐め

手の届かない天井を舐め、汚い「しみ」をつけてしまう妖怪。暗くて高い天井と汚いしみと相まって、何かいるような感覚を覚える。そんな虚像を家全体に纏わせる妖怪である。



台所を下げ、料理の匂いがまわりに流れ込むように高低差をつくる。珪藻土の吊り天井で蒸気を受けとることで、匂いだけを通す。交換可能な天井はしみをも味わいとして許容する。



あしまがり

歩いている人に、綿のようなものを絡みつけて歩くのを邪魔する妖怪。飛脚ばすたびに大きくなり、しまいは蹴ることのできない大きさになって歩けなくなり、座り込んでしまうほど。

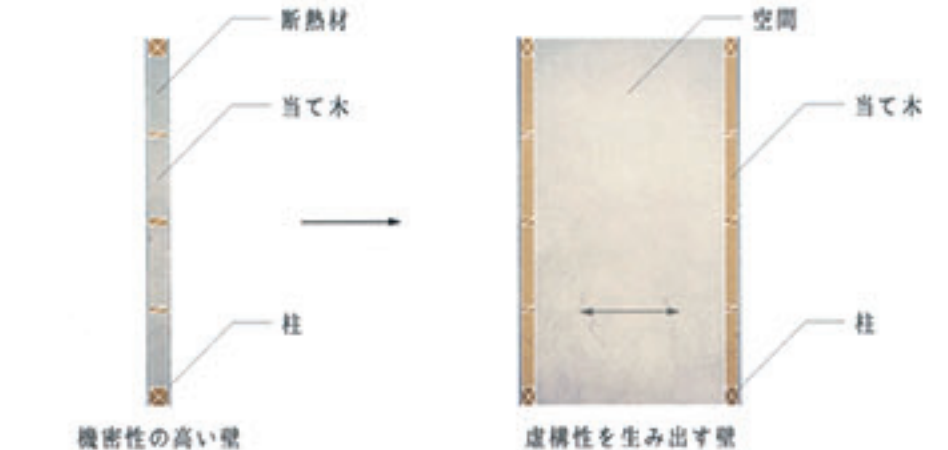


途中から階段の蹴上を低く、踏面を大きくとる。スロープのように階段を回しながら心地良くゆったりと歩くようになる。ちょっとした踊り場や取り込んだ中庭に、足を止める。



家鳴り

ポルターガイストという言葉があるが、日本ではこれを家鳴りといって、小鬼のようなもののいたずらであるとした。障子や壁をガタガタと動き出し、家中で揺れる音をさせる妖怪。



本来の壁の中身を見せる。それまで機密性の高かった壁は虚構性を持つようになる。生まれた空間の層によって断熱などを担保すると同時に、家全体の壁の中に虚像を孕む感覚を覚える。